

鹿児島県さつま町（国内 36 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 3 年 1 月 13 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は、山間部に位置し、付近は雑木林に囲まれている。
- ② 調査時、発生農場から約 700m の距離にあるため池でコガモ 10 羽、キンクロハジロ 10 羽等、計 30 羽程度の水鳥類が、発生農場から約 300m の距離にある河川でカルガモ 126 羽、ヒドリガモ 109 羽等、計 340 羽程度の水鳥類が認められた。
- ③ 当該農場には平飼いの開放鶏舎が 3 棟あり、発生時は全ての鶏舎で同じ日齢の肉用鶏が飼養されていた。発生鶏舎は農場の最も奥側に位置する鶏舎であった。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、当該農場では、平時より 1 鶏舎 1 日あたりの死亡羽数が 20～60 羽程度確認されており、今回の発生鶏舎においても同様に 20～30 羽程度の死亡鶏が確認されていたとのこと。
- ② 1 月 9 日、発生鶏舎では 54 羽の死亡が確認されていたが、この日は換気扇が故障していたことから、換気不良等によるストレスによるものと認識していたとのこと。換気扇の再稼働後、翌 10 日も 136 羽の死亡が確認されたが、前日の温度上昇によるものと認識していたとのこと。しかしながら、11 日には死亡羽数が 700 羽程度まで増加したことから系列会社の担当者に連絡し、12 日には系列会社の担当者から、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ③ 1 月 11 日の死亡鶏は発生鶏舎内に散在していたが、鶏舎内の 2 区画のうち、鶏舎手前側（鶏舎出入口側）の区画が死亡羽数はやや多かったとのこと。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場では専属の従業員 1 名で管理を行っており、1 日 2 回、鶏舎において鶏の健康観察を行うとともに、死亡鶏の回収を行っていた。
- ② 鶏の導入時及び出荷時には、系列会社の従業員が手伝っていた。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 飼養管理者によると、農場専用の作業着と長靴を使用していた。鶏舎毎に専用の長靴を設置しており、鶏舎に入る際、鶏舎専用の長靴に履き替えていた。また、農場内では手袋を着用し、鶏舎ごとに手袋の交換も行っていたとのこと。
- ② 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、タンク内への野鳥等の侵入やタンク内の飼料への野鳥の糞等の混入の可能性は低い状況であった。
- ③ 飼養鶏への給与水は、井戸水を塩素で消毒した上で供給されていた。
- ④ 鶏糞の処理は、オールアウト後に堆肥化処理していたため、今回の発生鶏群については、鶏糞の搬出はなかった。
- ⑤ 健康観察時に回収した死亡鶏は、飼養管理者が農場所所有の車両に積んで、ビニルシートで覆いをした上で農場から約 4km 離れたところに設置する保管庫に適宜搬出していた。保管庫の死亡鶏は、1 か月に 1～2 回程度化製処理業者が回収しており、12 月 21 日に回収して以降、回収は行われていなかった。また、当該保管庫は、近隣農場と共用していたが、設置場所に入出入りする際、動力噴霧器による車両消毒を行っていた。
- ⑥ 飼養管理者によると、オールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は鶏舎内の清掃・消毒を行っていたとのこと。
- ⑦ 飼養管理者によると、農場敷地内には週 1 回程度消石灰を散布していたとのこと。
- ⑧ 飼養管理者によると、車両が当該農場に入出入りする際、農場の入口に設置された動

力噴霧器により消毒していたが、衛生管理区域の境界が明確にされていなかったとのこと。

- ⑨ 発生鶏舎の側面は金網（マス目は約 2.0×2.0cm）とその外側にはロールカーテンが設置されている。飼養管理者によると、当該鶏群は発生の直前までは全てのカーテンを閉めていたとのこと。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 発生鶏舎は、側面の金網や外側のロールカーテンには大きな破損は確認されなかったが、鶏舎の屋根と壁面の継ぎ目の一部で小型の野生動物が侵入可能な 3cm 程度の隙間が確認された箇所があった。鶏舎壁面には防鳥ネットが設置されていたが、破損が複数箇所を確認され、ネットの破損や隙間が確認された箇所の鶏舎内側の梁等には、ネズミ等が通過したと思われる痕跡が確認された。
- ② 飼養管理者によると、過去に鶏舎内外でネズミを見かけることがあったとのこと。なお、調査時にも鶏舎外でネズミの死骸が確認された。
- ③ 飼養管理者によると、農場内ではアナグマ等のほ乳類やカラスやスズメ等の野鳥を見かけるが、鶏舎内で見かけることはなかったとのこと。